

災害に強い「まち」、強い「くに」とは…？（その3）

助けてくれる人がいる 共助 & 公助

災害が起こったとき、「助けてくれる人」がいれば多くの命が助かり、復旧・復興も早く進みます。消防、警察、自衛隊、そして、役所や建設業の人達、さらには「近隣との助け合い」がとても大切です。

ただし——なんと言っても「自分の身は自分で守る」ことの大切さを忘れてはなりません。 自助

考えてみよう 次のようなエピソードを踏まえて、いま、自分たちの「まち」を強くするために、何が必要なのかを考えてみよう。

●東日本大震災のとき、多くの方々が「津波」で命を落としました。このことはつまり、地震直後には、その方々の大半が生きていた事を意味しています。もし、その方々が津波から「逃げる」ことが出来ていれば、命を落とさずにすんだのかも…かもしれません。 自助



●阪神淡路大震災のとき、多くの方々ががれきの下敷きになりました。その大半を救い出したのが「近隣の人達」でした。

共助



●東日本大震災のとき、自衛隊が被災者の救援に大活躍しました。でも地震直後、被災地への道路はがれきの山で埋もれ、自衛隊でも通ることができませんでした。そんな中、建設機械を使い、がれきを除去し、道路を通していったのが地元の建設業の人達でした。その方々の中には、家族が津波に流されたという人もたくさんいました。その他、土石流、大雪、洪水などの災害でも地域の建設業の方々が被災者を救い出してきました。 公助



チャレンジレベル

災害に強い「まち」「くに」をどうつくるかを 災害弱者の人たちのことも思いやりつつ、 皆がいつも考え、イメージしている

災害に強いまち、くにをつくるためには、どうしたらいいのかを、それぞれの人の立場で考えることが必要です。お父さん・お母さん、学校の先生、体の不自由な人、高齢者などいろいろな地域の人たちや会社、役所、政治家の人たち、そして、私たち全員が「強いまち・くにを作るためにはどうすればいいのか？」を考え、話し合い、いろんな取り組みを進め、時に訓練を重ねていくことが何よりも大切です。

考えてみよう どんな「しくみ」があれば、このことを常に忘れずに考えていけるのか、自分の家や学校、あるいは会社、政府などのそれぞれの場面について考えてみよう。

コラム 「稲むらの火」の物語とその後

●物語のあらすじ

1854（安政元）年11月5日（旧暦）、安政南海地震による大津波が紀州藩広村（現在の和歌山県広川町）を襲いました。このとき、村の郷士、濱口梧陵が、暗闇の中で逃げ遅れていた村人を、収穫したばかりの稲を積み上げた「稲むら」に火を放って高台に導きました。濱口梧陵の自分の財産を投げ打った犠牲的精神により、多くの命が救われたのです。

※この物語は1937（昭和12）年から10年間にわたり小学校国語読本（5年生）に掲載されました。



濱口梧陵
出典：広川町教育委員会

●災害後の復旧・復興の取組

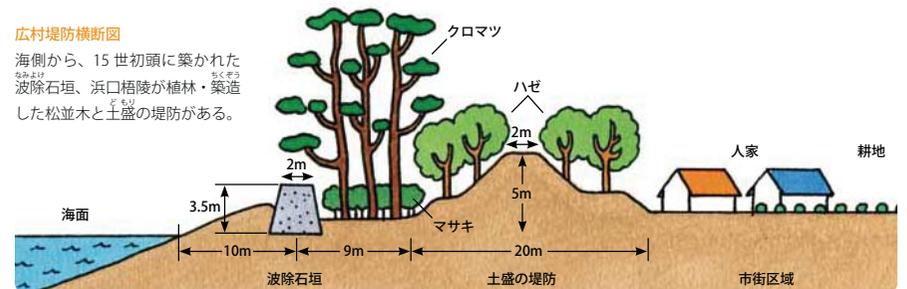
震災後、濱口梧陵は被災者のために住まいを建てて提供しました。さらに堤防建設のために、再び多額の私財を投じることを決意して、堤防建設工事を行う被災者に日当を払うことで村人の他の地域への離散を防ぎ、4年の歳月をかけて高さ5m、長さ600mの堤防を完成させました。現在も当時の姿を留める広村堤防は、1946（昭和21）年の昭和南海地震による大津波では、村の大部分を津波から守りました。

●堤防を守るあゆみ

1854年の大津波から50回忌を迎えた1903年、犠牲になった人々の霊をなくさめるとともに、濱口梧陵らの偉業をしのび、広村の有志の人々による堤防への土盛りが行われました。これが「津波祭」の始まりで、以後、毎年11月には堤防の補修と防災への意識を継続するため、地元の小・中学生による土盛りが行なわれるなど、現在に至るまで続いています。

広村堤防横断面図

海側から、15世初頭に築かれた波除石垣、濱口梧陵が植林・築造した松並木と土盛りの堤防がある。



参考URL…内閣府防災担当：http://www.tokaiyou.or.jp/bousai/inamura-top_j.htm 稲むらの火の館：<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>